心を満たす食べ物を届ける

今のままでいいのか？ 本当は何がしたいのだろう？

この疑問に，毎日もがき続けてきた立花貴さんは，東日本大震災後，目の前の人たちのために，ただひたすらに動き続けるという経験をした結果，自分の心が本当に求めているものに気付くことができた。

10万食の炊き出しを行った中野中学校出身の立花さんに，活動を振り返ってのお話を聞いた。

立花さんたちのメンバーが行った温かいハンバーグの炊き出し

1 3.11　あの日東京では

突然，電車が緊急停止。大きな揺れを感じると同時に，車内に悲鳴がこだました。ツイッターのタイムラインがものすごいスピードで流れていた。皆のツイートから，どうやら震源地は宮城県沖のようだと分かった。「やっぱり来たか…。」突然，あの時の地震の光景がフラッシュバックして不安に襲われた。小学校３年生のときに，宮城県沖地震を経験した。そのときの怖さが蘇（よみがえ）ったのだ。

仙台にいる母と妹に連絡を取ろうとしたが，つながらない。地震はある程度覚悟していたが，平野を襲う津波は考えもしなかった。一刻も早く仙台に行かなければならない。そう心で決めた。しかし，その日は東京も帰宅困難者たちで混乱していた。

2 目にした仙台の光景

仙台はどうなっているのか。二人は無事なのか。実際に見て確認したかった。仙台の中心部はさほど被害があるようには見えなかったが，国道45号線を多賀城方面に向かい，七北田川を越える辺りから風景が一変した。２階建ての家が川の真ん中まで流されてきていた。沿岸部には真っ黒な泥が辺り一面を覆い尽くしていた。まったく信じられない光景だった。母と妹は指定避難所ではない，福祉センターに居た。指定避難所からあふれ出た人たちを収容していたのだ。

他の避難所を巡ってみると，食事も取れないところがあった。その時の人々の姿が頭から離れなかった。この状況をなんとかしなくてはいけない。炊き出しの支援を始めたのは，その一心だけだった。

しかし，支援に動き出したのは私だけではない。

こんな大変な状況の中で，仙台在住のパキスタンのボランティアの方々が1,000人分のカレーを作っていた。近所のコンビニでは停電の真っ暗な店内でトイレを貸し出したり，水を提供したりしていた。

避難所では，家を流されたり，母親を亡くしてしまったりした中学生を含む十数名が元気に明るく，一生懸命に避難所の仕事をしていた。どれも私にはぐっとくる姿だった。

3 温かくておいしいものを

被災地に着いても，どこに行くという当てがあったわけではない。大規模半壊の実家に泊まりながら，毎日あちこちの避難所を回った。自分にできることは何か，その場で考えながら無我夢中で動いていた。

過酷な状況になったとき，おなかが温まる食事をするとなんとなく力が出てくるのを自分自身も体験していた。少しでも元気が出るよう，温かくておいしいものを食べてもらいたい。その一心で，食事の差し入れや炊き出しのために走り回った。

2011年４～５月支援活動スケジュールから

＜炊き出し＞

４月30日	石巻北上	焼肉3,500名分
５月１日	石巻湊	昼食500食
５月２日	石巻牡鹿	昼食500食
５月３日	石巻雄勝	昼食500食
５月４日	気仙沼小泉	昼食230食
５月14日	仙台高砂	昼食200食
５月15日	石巻鮎川	昼食250食

＜配送・配給＞

４月中旬～	学校給食おかず配送	平日毎日70食
５月12日～	弁当配給	平日毎日530食

4 役に立ちたい

社会貢献をしたいけれど何をしたらいいか分からないという人には，「まずは自分の目でしっかり見て」と話している。エネルギーのかけらみたいなものが，自分の中に残るはずだ。そしてどんなに小さなことでもいいから動き出してみることだ。

もう一つ大切なのは，社会貢献する前に，自分のことはもちろん家族や自分の周りにいる人を大切にすること。身近な人を幸せにできない人が，遠くの人に何かできることなどないと思う。社会貢献をしたいと思うなら，大切な人を守り，個人としてきちんと自立しているということ，社会で働いて役に立っていることが基本だと思う。

写真撮影：市川勝弘

立花　貴　たちばな・たかし

東日本大震災発生直後，東京の会社から地元宮城へ戻り，炊き出しの支援を始める。震災後，石巻市雄勝町に住民票を移し，産業創出と環境社会学校づくりに取り組んでいる。

炊き出しで始まった支援活動は，放課後の学習支援や「雄勝アカデミー」などでの体験学習の提供へと広がり，被災地の子どもたちに一層の笑顔を与えている。